九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学附属図書館の「エニグマ」について

梶原，瑠衣
九州大学附属図書館医学図書館参考調査係

https://doi.org/10.15017/1523954

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2014/2015, pp.30-32, 2015-08. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

報告

九州大学附属図書館の「エニグマ」について

梶原 瑠衣†

<抄録>
九州大学附属図書館所蔵の文芸同人誌「エニグマ」について紹介する．
<キーワード> エニグマ，久保猪之吉，中山文庫，檜垣文庫

On the Literary Magazine ENIGMA kept at Kyushu University Library

KAJIWARA Rui

1. はじめに

「エニグマ」は大正初期の短い間に発行されていた文芸同人誌である．この雑誌は，福岡の近代文学史の源流として位置づけられている．しかし，残念ながら，発行されたすべての巻号を所蔵・公開している機関はない．本稿では，九州大学附属図書館（以下，本学図書館）で所蔵している 3 冊と，そのうち 2 冊の目次を紹介する．

2. 「エニグマ」について

「エニグマ」は，九州帝国大学医学部名誉教授・久保猪之吉を中心として，教官，学生グループによって発行されていた．時期は 1913（大正 2）年から 1915（大正 4 年）の間である．3 年の間に，20 号前後発行されたようであるが，長い間「まぼろしの雑誌」と言われてきた．[1] 現在のところ，はっきりと所蔵が確認できるのは，下記 3 機関の 4 号である．

本学図書館：第 1 巻第 2 号，1914.6，1914.8
日本近代文学館：第 1 巻第 2 号
野田宇太郎文学資料館：第 1 巻 12 月号

発行の経緯や内容，執筆者については，井上洋子氏，和泉僚子氏の先行研究が詳しい．[2 3] 井上洋子氏作成の「総目次」（上記 4 号以外にも現存する号を含む）を見ると，論文，詩，俳句，短歌など多彩な作品が掲載されていたことがわかる．執筆者は大学関係者だけではなく，九州日報や福岡日日新聞の記者，若山牧水や伊藤燁子（柳原白蓮）などの文壇関係者の名前も見られる．「エニグマ」は，大学内だけで完結した雑誌ではなく，大学外とつながり，広がりを持つ存在であったことが伺える．

3. 本学図書館所蔵の 3 冊について

本学図書館では，文系合同図書室に 1 冊，伊都図書館に 2 冊のエニグマを所蔵している．前者と後者では本学図書館に受け入れられた経緯が異なるため，それぞれ分けて紹介する．

3.1. 1 巻 2 号 1913（大正 2）年発行

所蔵館：文系合同図書室
文庫名：中山文庫

中山文庫は，1960（昭和 35）年寄贈の中山森彦名誉教授及び中山平次郎名誉教授兄弟の旧蔵書である．中山兄弟はどちらも医学部教授であったが，兄・森彦は美術評論家として，弟・平次郎は考古学研究家としても有名である．

この号には，評論「高良山の磐境を中心として筑紫帝国の盛衰を論ず」が掲載されている．筆者の松本重彦は中山平次郎のペンネームである可能性もあるといわれている．[2]

3.2. 1914. 6，1914. 8

所蔵館：伊都図書館
文庫名：檜垣文庫

檜垣文庫は，本学教養部で国史学を担当された檜垣元吉名誉教授の遺蔵資料である．九州関係の郷土資料が多い．元は六本松図書館で受け入れられたが，キャンパス移転に伴い，資料種別によって箱崎キャンパスの記録資料館，総合研究博物館，伊都キャンパスの伊

† かじわら るい　九州大学附属図書館医学図書館参考調査係　（〒812-8582 福岡市東区馬出 3 丁目 1-1）　E-mail: kajiwara.rui.351@m.kyushu-u.ac.jp

都図書館に移設された.

これらの号は，どちらも裏表紙左上に「200」と鉛筆書きがあり，古書店で売られていたのではないかと予想される．1914.8 の表紙左下には「久保」とインクで記されている．久保猪之吉の死後，その蔵書は売り立てられ，現在でもたまに古書市場に現れるという．[4] 憶測の範疇を出ないが，檜垣文庫の 2 冊は，久保猪之吉の旧蔵書なのかもしれない.

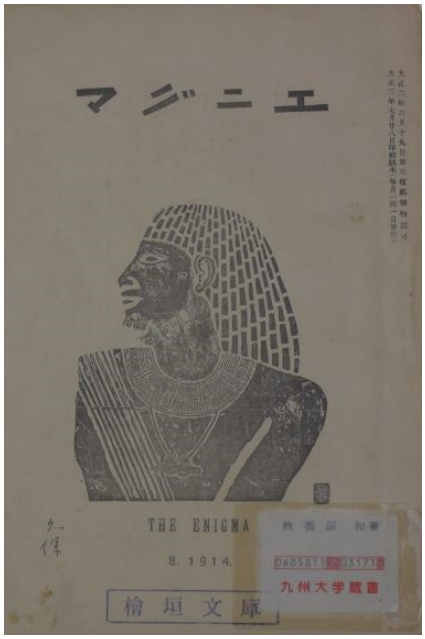

図 1　「エニグマ」1914.8　表紙　伊都図書館所蔵

4. 伊都図書館所蔵号目次

文系合同図書室所蔵の 1 巻 2 号は, すでに前述の「総目次」よって紹介されている．ここでは，まだ他で紹介されていない 1914.6，1914.8 の目次を紹介する．目次を見るだけでも，当時のエニグマ同人たちの雰囲気が伝わってくる．編集後記には，結核で久保猪之から治療を受けていた歌人の長塚節や，伊藤夫人（柳原白蓮）の名前も見える．[5]

なお，目次中の［ ］内は筆者が追加した参考情報である．旧漢字は新漢字に改めた.

4.1. 1914.6

大正 3 年 6 月 15 日印刷納本

82 ページ　15 銭

4.1.1. 目次

近代劇博多開演［評論］曽田共助　1
『獄中哀歌』と『塑像』と［評論］小野健治　6
火と水と［短歌］久保猪之吉　11
空しきたましい［詩］加藤介春　18
舞扇［詩］すみ江　20
陽炎［小説］小野健治　21
大阪に帰るまで［小説］川邊杏子　31
オペラグラス［随筆］久保より江　48
石竹草［短歌］石田昌　53
春より夏へ［短歌］川崎達夫　54
故郷にて歌へる［短歌］小野健治　55
朝鮮のうた［短歌］文子　56
太陽の神話［評論］諸岡存　57
ロッテプリッツエルの蝋人形［評論］灰野庄平　67
科学的模倣か創造的幻影か［評論］　灰野庄平　69
日本劇壇の西洋劇［評論］　西巻透三　71
雨がふる［随筆］曽田共助　77
小横町より［感想］川邊杏子　80
後印象記［感想］西巻透三　80
編集だより
女（裏絵）［写真］竹久夢二

4.1.2. 特記事項

目次には記載がないが，30 ページに長塚節の「初夏の東京より」，作家・江原小弥太の「新緑の都より」という文章がある.

編集だよりには「伊藤夫人が耳がお悪くて久保先生の手術を受けられて目下入院中といふのがお気の毒である.」「長塚節氏も少し悪い所があつて久保先生の治療を受けて居られる，氏も近々耳鼻科に入院の筈.」という記述がある.

裏表紙の写真については，編集だよりに「裏の絵は久保先生より寄せられたものですが写真で彩色がないからお気の毒である.」と書かれている.

図 2　「エニグマ」1914.6　裏表紙　伊都図書館所蔵

4.2. 1914.8

大正 3 年 7 月 28 日印刷納本
62 ページ　11 銭

4.2.1. 目次

巻子（小説）小野健治　1
雨（詩）久保猪之吉　9
馬鹿（詩）久保猪之吉　10
人形と小猫（喜劇）川邊杏子　12
揺籃の子（詩）呉葉　32
Die Tat（随筆）曽田共助　34
音楽会の夜（歌）川崎達夫　39
夏草（歌）うもれ木　40
哀しき幸［短歌］文子　42
小品二題［小説］葉月　公孫樹　44
或る夜［随筆］加藤介春　48
うた二首［短歌］より江　50
切抜帳［感想］西巻透三　51
十二疋の猫［随筆］久保より江　54
小横町より［感想］杏子　58
その後［感想］兎鳥　59
松原より［編集後記］より江　62
アルトゥール，シュニレッツレル氏の邸宅（維納）と同氏の筆跡（口絵）［写真］

4.2.2. 特記事項

編集後記には「御入院中の長塚さんに何かいただく御約束をしてあつたのですが，あまりお暑いから，無理をなさらないやうにと，来月号に願ふ事にいたしました. 病室で大分蚤の歌がお出来になつたさうですが，歌はどうしてもアララギでなくては出したくないやうな気がするとおつしやつていました．紅唐紙に歌を書いて壁に張つて楽しんでいらつしやいます.」という記述がある.

口絵の写真はオーストリアの医師で作家のアルテゥル・シュニッツラーの邸宅と筆跡である.

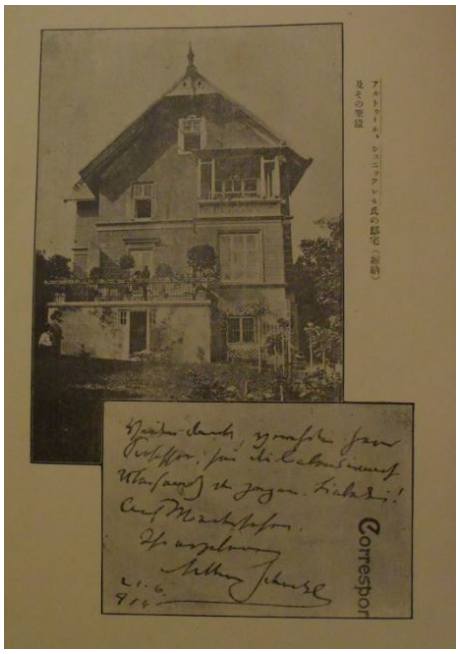

図 3　「エニグマ」1914.8　口絵　伊都図書館所蔵

5. おわりに

「エニグマ」は本学関係資料としてだけでなく，福岡の文学史から見ても価値のある雑誌である．本学図書館には，ほかにも，あまり存在を知られていない価値ある資料がまだ多くあると思われる．未来の研究者のために，そのような資料を大切に残して伝えていきたい.

[謝辞]

本稿の執筆に際し，福岡市文学館中山千枝子氏にお世話になりました．本学図書館職員の皆様には，資料の利用や参考資料収集に協力していただきました．記してお礼申し上げます.

参考文献

[1] 原田種夫，黎明期の人びと：西日本文壇前史，西日本新聞社，福岡，1974.
[2] 井上洋子，“書誌 「エニグマ」発行の経緯と「総目次」〔創刊号(大正 2 年 2 月)～第 3 巻 1 号(大正 4 年 1 月)〕--付・久保猪之吉略年譜，「エニグマ」人名録，”叙説 2，No.6，pp.136-155，2003.
[3] 和泉僚子，“久保猪之吉・より江婦人と雑誌「エニグマ」の周辺について，”福岡県地域史研究, Vol.16, pp.165-182, 1998.
[4] 田村隆，“久保猪之吉の旧蔵書，” 九州大学附属図書館研究開発室年報，2011/2012，pp.32-33，2012.
[5] 石田忠彦，“大正三年大学病院グラフィティ　節・猪之吉・より江・漱石・白蓮，” 叙説，Vol.2，pp.57-68，1990.